

## 小林秀雄の私小説批評

——日本資本主義論争との接点——

野村幸一郎

はじめに

今日においても多くの文学史の叙述において、私小説が日本独自の文学形式として位置づけられていることは、周知の通りである。このような文学史叙述の起源を調べていく時、戦時下、正確には昭和一五年前後から二〇年までの私小説論議において、同様の主張が繰り返し行われていることに気づく。ここでは、私小説で描かれた〈私〉と、平安期の日記文学や『徒然草』や『奥の細道』などの随筆に描かれた〈私〉との、一致が論じられている。それが、大正以来繰り返されてきた私小説論議の、復古的風潮や国民文学論への合流であったことは、容易に想像できる。

そして、さらにその起源を遡っていくと、昭和一〇年の五月から八月まで『経済往来』に連載された「私小説論」を初めとする、小林秀雄による一連の私小説批評に行き当たる。当時小林は、日本資本主義論争からマルクス主義について学んだふしが見られ、後に詳しく考察していくつもりであるが、「故郷を失った文学」や「私小説論」で提示した小林の歴史認識は、労農派のそれに近似している。戦時下の私小説論議は、そのよう

な小林の議論を反転させる形で推移したと、今日から見れば言うことができよう。以下の考察においては、日本資本主義論争と小林の私小説批評との接点を探りつつ、最終的には、戦時下の私小説論議の起源としての「私小説論」の位置づけを、試みていくつもりである。

### 〈私〉の封建的性格

「私小説論」へと繋がる、小林の本格的な私小説批評は「私小説について」から始まる。とくに注目すべきは、ここで小林が宇野浩二の「私小説私見」に言及している箇所である。宇野浩二はこの随筆において、自然主義が成立して以来、今日まで、日本の近代文学の主流がすべて私小説の側にあつたと論じた上で「これは日本だけのもので、また日本の最近代の小説の特徴の一つと思はれるが、よく考へて見ると不思議な現象である」と、述べている。それに対して、小林は「今日重要な問題は、『よく考へてみると不思議な現象である』といふ処だけにある」と、指摘する。

小林が言う、「不思議な現象」とは、私小説が近代文学の主流を占めてきたというのが、日本独自の現象であり、西洋には見られなかつた点を指す。だから、小林の眼にはそれが「今日重要な問題」に映つたわけである。結果、今日の文学を考えることは、小林にとつて、日本近代文学が、西欧とは同じコースを辿らなかつた要因を考えると収斂されていくことになる。

「私小説論」は、このような小林の関心の在り方を如実に表している。ここで小林は、「わが国の自然主義小説はブルジョア文学といふより封建主義的文学であり、西洋の自然主義の一流品が、その限界に時代性を持つてゐたに反して、わが国の私小説の傑作は個人の明瞭な顔立ちを示してゐる」と語っている。封建と近代と

いう歴史意識を批評に持ち込み、日本固有の文学現象である自然主義・私小説を、近代社会ではなく封建社会に根を持つ文学として捉え直すべきことを、ここで小林は論じている。

ここでの小林の議論は、私小説や自然主義文学の封建的性格を指摘する点において、今日の文学史的常識から見れば、一見奇異にも見える。しかし、それはあくまで今日から見ればそう見えるに過ぎないのであって、先ほど宇野浩二が言及していた、正宗白鳥にせよ、徳田秋声にせよ、あるいは、田山花袋にせよ、大正期以降の作品群を闊した場合、長谷川天溪が「一切の因習的思想や、理想を排斥すると同時に、吾が脳底に映じた現実を承認しなければならぬ<sup>(2)</sup>」と主張したような、既成道徳との闘争の姿勢はもはや姿を消している。この時期の自然主義文学は、むしろ虚無的な諦観が全体を覆っているような作品が、多数を占めていた。たとえば、花袋の『残雪<sup>(3)</sup>』においては、苦悩の果てに「不動不壊の金剛心」を掴み、宗教的境地にいたるまでの心的過程が描かれている。あるいは、『残雪』執筆のためのノートとしての意味を持つ「東京の三十年<sup>(4)</sup>」には、次のような記述が存在する。

こうして時は移っていく。あらゆる人物も、あらゆる事業も、あらゆる悲劇も、すべてその中へと一つ一つ永久に消えて行ってしまうのである。そして新しい時代と新しい人間とが、同じ地上を自分一人の生活のやうな顔をして歩いて行くのである。五十年後は？ 百年後は？

ここには、現実世界の出来事をすべてはかない夢とでも見なすような、諦念に彩られた宗教的な悟達の境地が、描かれている。このように見えてくると、確かに宇野浩二、小林秀雄、そして、その影響下で執筆された自然主義・私小説についての批評の意味するところが明らかとなる。既成道徳との闘争をくり返した明治四〇年代の自然主義は、新しい舶来の文学に酔っていたに過ぎず、時が経ち、酔いが醒めた時、そこに姿を現したの  
は日本古来の文学的土壌、現実をはかないものと見なすような諦念の境地を理想視する、「私の封建的残滓」

であつたのである。小林の議論が、このような大正期以降の自然主義文学、私小説を踏まえてのものであることは、間違いない。

さらに、興味深いのは、このような自然主義や私小説に描かれた〈私〉の諦観や宗教的悟達、「伝統的自我の虚無性」(前掲「現実派と理想派」)を指して、小林が、「封建主義的」、あるいは「封建的」という表象を用いて、解析を試みている点である。

ここで同時代の批評に眼を転じてみると、やはり、〈封建的〉という表象をキーワードとして自然主義・私小説を解析した批評を、散見することができる。たとえば、篠田太郎「日本に於ける自然主義文学の社会的性質について」<sup>(5)</sup>には、「自然主義がブルジョアの理論であり、封建時代的な遺制、観念の排撃を以て新時代のブルジョアジーのために新たな制度・生活・観念を建設するための基礎を築くものであり、その将来は帝国主義に向つてゐるものである」「日本に於て特殊の性質を帯びたが大体この方向をとつてゐる」という記述が存在する。あるいは、佐藤信衛「文学者はどんな市民か」<sup>(6)</sup>には、「日本の社会は尚多くの封建的残存物を包蔵した半封建的社会であり、市民階級は未だ政治的文化的に成熟してゐなかつた」「大正期以降に於ても我が国の文化及び文芸は十分に市民的であるとは言ひ得ない」という記述が、存在する。

この内、篠田の「日本に於ける自然主義文学の社会的性質について」は、小林の「私小説論」発表に先立つこと一年半、昭和八年の一二月に発表されたものであるが、一読して明らかなおり、はつきりとマルキシズムの影響を認めることができる。しかし、篠田の場合、西欧の自然主義文学と比べた場合の日本自然主義の特殊性を認めつつも、それを「封建的」性格とは明確に規定せず、むしろ、封建主義的な遺制に対する闘争的性格に、その本質を見ようとしている。長谷川天溪の批評をマルキシズムの立場から捉え直した分析と言つてもよい。

ここで、注意すべきは、自然主義文学を封建主義的遺制と闘争するブルジョア文学と規定する以上、明治維新をブルジョア革命、封建主義社会を解体していくプロセスと規定する歴史認識を、前提としてなければならぬことである。篠田にせよ、小林にせよ、佐藤にせよ、マルキシズムの示した歴史認識への牽引と反撥の中で、同時代文学の解析を試みたと、見なければならぬ。自然主義や私小説の分析に〈封建的〉というキーワードを用いるのは、同時代の批評を見る限り、小林の専売特許ではなかったのである。

また、同時代のマルキシズムに眼を転じると、〈封建〉という表象は、いわゆる日本資本主義論争、その中でも封建遺制論争を通じて、同時代の論壇に定着化しつつあった事実が気がつく。そして、小林の私小説観にも、日本資本主義論争の影響の跡を指摘することができるのである。

論争は多岐にわたるため、その性格を一言で言い表すことは難しい。しかし、小林が「私小説論」であつかつたのと、テーマとしてまつたく重なる、封建遺制論争に絞って言うならば、青木孝平が指摘するように、<sup>(7)</sup>もつとも根本的な対立点は、農村の封建的要素、および天皇制国家の絶対主義的性格をどのように理解するかにあった、と見なすことができる。明治維新によつて幕藩体制は崩壊し、大名の領有権は剝奪されたが、もう一方において江戸以来の地主制はむしろ強化され、農村には封建的な慣習は<sup>(8)</sup>いまだ、強固に存在していた。

講座派はこれを半封建的土地所有と規定し、日本資本主義は、このような半農奴制的零細農と支配する封建的領主と資本家勢力の勢力の均衡の上になりたつものと規定した。たとえば、平野義太郎は「明治維新における政治的支配形態」<sup>(8)</sup>において、「明治政府」は「地租改正」によつて「半封建的土地所有を拡大的に再生産させる方向にむかはせた」、「明治政府の政治支配形態」は、「半隷農体制を維持しながら資本主義を助長するといふ半農奴的資本主義のもつ基本的矛盾に制約せられる」と論じている。それゆえ天皇制国家は、このような両者に依拠しながらも、それらから相対的に独立した権力として、西欧において、封建制から資本主義への過

渡期に成立した「絶対王政」に照応するものとみなされる。つまり明治維新はブルジョア革命ではなく、純粹封建制から絶対主義への権力再編と見なされたのである。

それに対して、労農派は、資本主義の成立は封建制の解体を前提としており、封建的土地所有の上に成立した資本主義など存在しないと批判した。農民の意識において地代はすでに貨幣化されており、維新後の新地主や小作農は、近代的土地所有制度に半ば移行しつつある、封建的慣習が残るとしても、資本主義の発展とともに早晩消滅していくはずである、と労農派は見なしている。猪俣津南雄は、「現代ブルジョアの政治的地位」<sup>(9)</sup>において、「我が地主の多くは、資本主義の発展と共に次第に貨幣資本家に転じた。彼等は、小作人が買入する余剰価値を、再び土地や農業に放下する代りに、銀行の定期預金と化し、公債、株券、社債に投じた」と論じている。この点については国家権力についても同じであり、山川均が「政治的統一戦線」<sup>(10)</sup>で、「わが国におけるブルジョアジーの政治的發展の現在の段階は、一般的には、明治維新によって開始せられた封建的勢力からブルジョアジーへの政権の推移を完了し、ブルジョアジーの政治的支配を確立するにいたった」と述べるように、たとえ絶対主義的な遺制を残しているとしても、天皇制は基本的にはブルジョア国家の一形態としての立憲君主制に他ならず、明治維新についても不徹底な面も持つが、厳密にはブルジョア革命と見なさなければならぬと、規定されることになる。

先に言及した篠田太郎の批評が、山川の歴史認識を踏まえて、自然主義文学の歴史的な位置づけを試みたものであることは明らかであろう。では、小林の場合は、日本資本主義論争に対してどのようなスタンスを取ったのか。

結論から言えば、小林秀雄の批評と日本資本主義論争とのもつとも根本的な差異は、そこで交わされた議論の応酬を手掛かりとして、分析の対象を農村から都市に移している点にある。おそらくその原因としては、日

本の近代文学のほとんどすべてが明治以降東京在住の作家によつて執筆されたこと、そして何よりも小林自身、東京出身であつたことが想定される。

「故郷を失つた文学」<sup>(1)</sup>において、小林は「東京に生まれた私ぐらゐの歳頃の大多数の人々」にとつて、『東京に生まれたといふ事』は『江戸つ兒』などといふ言葉で言ひ表はせるものではない」と述べた上で、次のように語っている。

たとへ東京生れの人達でも、一と廻りも年が上ならもう通じ難いのぢやないかと思はれるものがある。  
 (中略)言つてみれば東京に生まれながら東京に生まれたといふ事がどうしても合点出来ない、又言つてみれば自分には故郷といふものがない、といふような一種不安な感情である。

ここで言うところの「江戸つ兒」という言葉と、「私小説論」で言うところの「私の封建的残滓」を、概念として等符で結ぶならば、右の言辞において小林の試みた自己解析の意味が明らかとなる。自意識の解析に拘泥し続けた小林は、私小説への関心を持つに到つて、西欧とは異なる日本の特殊性を〈私〉は背負っているのか、背負っているのならば、それはどのようなものか、背負っていないとすれば、それはなぜか、と問いかけ始めた。そして、そのような問題意識の下に東京に産まれ育つた〈私〉の解析を試みた時、そこに見えた〈私〉の姿とは、「封建的残滓」を一切払拭した、つまり、すでに「江戸つ兒」ではなくなつてしまつていた、故郷喪失者、「都会人といふ抽象人」としての〈私〉であつたのである。橋川文三は、小林が『日本発達史講座』の成果から学んだところがあると指摘しているが、むしろ小林の解析は、封建遺制論争において講座派に對峙した労農派にやや近いスタンスを取つている。小林の言う「都会人」を、近代文明と資本主義の発達が産み出した新しい社会の人間の在り方と言ひ換えるならば、明治維新は講座派の言うような、封建主義社会内部における権力の移譲ではありえない。ただし、労農派とまったく同じ歴史認識に立つわけでもない。小林は、

先に言及した猪俣のように、農村における近代性を主張しているわけではないからである。都市に関しては、正確に言えば、東京という都会に生まれ育つた自分や自分と同じ世代に関して言えば、〈私〉の内部に「封建的残滓」は一切見あたらないと、言っているのである。

あるいは、「私小説論」には次のような記述が存在する。

わが国の自然主義文学の運動が、遂に独特な私小説を育て上げるに至つたのは、(中略)何を置いても先ず西洋に私小説が生れた外的事情がわが国になかつた事による。自然主義文学は輸入されたが、この文学の背景たる実証主義思想を育てるためには、わが国の近代市民精神は狭隘であつたのみならず、要らない古い肥料が多すぎたのである。新しい思想を育てる地盤がなくとも、人々は新しい思想に酔ふ事は出来る。

また、小林は同じ「私小説論」で、「私の封建的残滓と社会の封建的残滓の微妙な一致の上に私小説は爛熟して行つた」とも、述べている。このような小林の認識の目新しさは、自然主義文学や私小説を二重構造として捉えている点にある。すなわち、自然主義の作家達は、主観的には封建遺制と闘争する近代イデオロギーの体现者でありながら、そのような自己意識を客観的に見れば、単に西欧の思想に心酔していたに過ぎない、そうである以上、〈酔い〉が醒めた時、彼らが内包する本来の〈私〉、つまり、「私の封建的残滓」が、ふたたび姿を現すのは当然の成り行きである、しかも、そのような〈私〉は「社会の封建的残滓」という物質的基盤に支えられている。小林の自然主義・私小説観は以上のようなものである。

ここでふたたび講座派の歴史認識を確認しておきたい。山田盛太郎は「工場工業の発達」<sup>(13)</sup>において、「日本資本主義の根本的特徴」として、「日本での産業資本の確立過程(明治三十年乃至四十年頃)」が「半農奴的年貢徴収と半隷属的労役との相関を編成づける所の、又産業資本と帝国主義転化とを同時に規定づける所の過程として現はれ」、「半農奴的軍事的帝国主義への転化を遂げ、その宏峻なる公的装備を遂げたこと」を、指摘し



ている。

小林と比べた場合、日本における〈近代〉、資本主義の成立期を、どの時期に見るかという点においても、両者の間に決定的な差異が存在していることが分かる。山田盛太郎は「日本での産業資本の確立過程(明治三十年乃至四十年頃)」に形成された「半農奴的軍事的帝国主義」が、「日本資本主義の根本的特徴」を形成している、すなわち、「社会の封建的残滓」こそが日本資本主義の特殊性であり、それは今日も変わらないと、主張している。それに対して、小林は、明治三、四〇年代においては、「社会の封建的残滓」は存在したし、それを物質的基盤として自然主義文学が成立したのは認めるにしても、今日においてはすでに消滅してしまったと主張している。「江戸つ兒」という言葉は、「たとへ東京生れの人達でも、一と廻りも年が上ならもう通じ難いのぢやないかと思はれる」と、小林は述べる。つまり、「江戸つ兒」という「封建的残滓」は、「一と廻り」上の世代では共有されているが、「東京に生まれた私ぐらゐの歳頃の大多数の人々」ではすでに消滅してしまっている、言い換えれば、明治四〇年代から今日までの間に、「封建的残滓」を支える現実的基盤が消滅してしまつたと、小林は見ているのである。

小林の視点に立てば、山田の言う「日本資本主義」、日本の近代化には発展がないということになる。山田の主張に従えば、日本の近代は明治三、四〇年頃にその「根本的特徴」を決定し、以後約三〇年、その姿を変えないことになる。小林はたとえ明治三、四〇年の段階で、多量なる封建的残存物があつたにしても、資本に発展があるならば、同時にこの残存物を破壊し、さらに、資本主義化してゆかざるをえないと見ているのであり、今日に生きる〈私〉の自己意識は、封建的残存物が払拭された今日の状況を物質的基盤として成立している、と、見ているのである。

猪俣津南雄は、前掲「現代ブルジョアの政治的地位」において、「吾々は封建的絶対主義の強き残存を認め

る。だがしかし、それは「イデオロギーとしての残存であることを忘れてはならぬ」、「物質的基盤を失っていることを忘れてはならぬ」と、論じている。一方、小林は未だ文壇の主流を占める私小説について、「外的な経済的な事情によつて、社会の生活様式は急速に変つて行つたが、作家等（筆者注、私小説作家を指す）の伝統的なもの考へは容易に変わる筈がなかつた」（『私小説論』）と分析して見せている。小林の私小説観と猪俣の日本資本主義観が、きわめて近似していることが分かる。小林にとつて、虚無的な諦観を自己意識とするような私小説は、イデオロギーとしての残存物に過ぎなかつたのであり、たとえ、今日なお純文学として文壇を席卷していたとしても、物質的基盤を喪失していく以上、やがて消滅していく宿命を免れないと見ていたのである。

### 故郷を失つた〈私〉の抽象性

では、「私の封建的残滓」を支える物質的基盤を喪失した結果、私小説はどのように変質していくと、小林は見ていたのだろうか。

小林は「故郷を失つた文学」において、次のように述べている。

自分の生活を省みて、そこに何かしら具体性といふものが大変欠如してゐる事に気づく。しつかりと足に地をつけた人間、社会人の面貌を見つける事が容易ではない。一と口に言へば東京に生れた東京人といふものを見付けるよりも、實際何処に生れたのでもない都会人といふ抽象人の顔の方が見付けやすい。

小林がここで言うところの故郷喪失者、「都会人といふ抽象人」としての〈私〉とは、宗教的な諦念や虚無感というような、自己意識を組織化し、構造化するための、「封建主義的」イデオロギーがすでに解体してし

まった時代を生きる現代人の謂いであることは、間違いない。小林はその姿を、「小説の問題Ⅰ」において、「機械の暴力が自然の形や運動を変化し攪乱して行くにつれて、自然の姿は次第に夢類似して来る」「人々はたゞ馬鹿面をして街頭に立てば、過度に加工された街々の運動が既に夢なのである」と説明する。都市文明、機械文明が産みだした様々な新しい感覚が人々の神経を絶えず刺激した結果、生成変化する様々な感覚の束としてしか生きることができなくなった、「都会人」の在り方そのものこそ、小林の言う「抽象人」を意味している。新感覚派をはじめとするモダニズム文学がその文学の基本に据えた都市感覚を、小林は近代文明の病理として捕らえている。

あるいは、「文学界の混乱<sup>(15)</sup>」においては、「自分の意識」が「手がつけられない程無秩序な有様になつてゐる」「秩序ある意識が秩序ある真理を捕へ、過不足のない意識が過不足のない真理を捕へる、そんな事はもう少くとも文学の世界では、お伽噺に過ぎぬ」とも語っている。人が、神経を刺激する感覚そのものと化せば、当然のことながら、恒久的な、統一的な人格としての〈私〉を、もはや望むことはできない。「抽象人」あるいは「夢」という言葉には、「秩序ある意識」を収奪された浮遊感の意味も込められている。中澤臨川は大正四年の段階においてすでに、近未来の日本では「急激な物質的富の勃興」が「凡ての社会制度を繁雑にし、目眩るしく人間の外的刺激を増加した」結果として、「一々の個人からも有機的統一が奪われ」と述べているが、<sup>(16)</sup>小林の自己解析は、まさにそれを生きている〈私〉を発見することを意味していたのである。

では、恒久的な〈私〉を都会文明によつて収奪された時、文学は〈私〉を如何に描くべきであるのか。この問題について、小林は『紋章』と『風雨強かるべし』とを讀む<sup>(17)</sup>において、次の様に、述べている。

僕等はおもや自然主義作家等の信じた個人といふ単位、これに付属する様々な性格規定を信ずる事が出来ない。それといふのも個人を描かず社会を描けといふ理論によつて信じられなくなつたのではない、僕

等がお互の性格の最も推測し難い時代に棲んであるといふ事実から信じられなくなつたのである。性格は個人のうちにはもはや安定してゐない。それは個人と個人との関係の上にはあらはれるといふものになつた。性格とは人と人との交渉の上に明滅する一種の文学的過程となつた。

ここで言う「個人のうちにはもはや安定してゐない」性格、あるいは「個人と個人との関係の上にはあらはれ」「人と人との交渉の上に明滅する一種の文学的過程となつた」性格とは、たとえば、横光利一の『機械』や牧野信一の初期作品群を想起してみれば、理解できるはずである。

牧野の『或る五月の朝の話』<sup>(18)</sup>には次のような記述がある。

「お前は運動は得意なの？」 Fは一寸嶮しい目付をして、彼の返答を待つた。不得意には違ひなかつたが、不得意だと正直に答へてしまうのが、彼は具合が悪かつた。常々彼はFの趣味におもねつて、いかにも自分は運動好きの快活な若者であるといふ風に見せかけてゐたから——（中略）……夏休みになつたら、直ぐさま何処か遠方の水泳場へ出掛けて、万事の擲つて専心泳ぎを練習するぞ、一ト月で上達するだらう

ここで、主人公は妹に期待される〈運動好きの快活な若者〉としての自己を賢明に演じようとしている。そして、妹が期待する自己像に、生身の自己を一致させるために、水泳の練習をすることまで決意している。彼はほんものの自分を他人にさらけ出すというような関係を結ぶことはできない。他人が築いた虚構の私と同体化していくことによつてしか、主人公は関係を結ぶことができない。彼は不変性をもつた人格として存在するのではなく、他人との関係の在り方によつてたえず姿を変える、可変的な何者かに過ぎず、〈私〉とは自己に関するイメージを発生させる場に過ぎない。ここで描かれた主人公の姿は、小林の言う「個人と個人との関係の上にはあらはれ」「人と人との交渉の上に明滅する一種の文学的過程」となつた「性格」に相応する。このよる可変的な〈私〉の在り方に、小林は都市文明によつて恒久的人格を収奪された〈私〉の姿を見出ししている

と見てよいはずである。

小林が「私小説論」において、アンドレ・ジイドの『贖金づくり』を取り上げて、「私小説は亡びたが、人々は『私』を征服しただらうか」と語るのも、以上の文脈から了解できるであろう。ここで小林はジイドの問題意識を、「小説の登場人物等は、作者によつて好都合な性格を持たされ、ある型の情熱を、心理の動きを持たされるが」「人間は実際には」「さういふ風には生きられない」と解析してみせている。この言辭は、先に言及した「僕等はもはや自然主義作家等の信じた個人といふ単位、これに付属する様々な性格規定を信ずる事が出来ない」という、自然主義・私小説批判と、内容的にまったく重なっている。都市文明・機械文明、マルキシズム風に言えば、ブルジョア社会の到来によつて、たしかに、自然主義や私小説の描いた「私の封建的残滓」は消滅した。しかし、それは文学が「私」を問題視すること自体がブルジョア的でもなければ、「私」の問題そのものが消滅したわけではない。新しい文明・新しい社会がもたらした新しい存在の様式、統一的人格を収奪された〈私〉の在り方が、文学のテーマとして浮上するはずである。これが小林の言う、いまだ克服されてはいない「私の問題」であり、その先駆者こそが、小林に言わせればジイドなのである。

『贖金づくり』には次のような言辭が存在する。

私の作品の《根本の主題》とでも呼ぶべきものが、どうやらわかりかけて来た。それは、現実の世界と、現実からわれわれが作りあげる表象との間の競合である。いや、多分そうなるだろう。外界はわれわれに自分を押しつけてくるし、われわれはそれぞれの解釈に押しつけようとする、その押しつけ方が、われわれの生活のドラマをなすのだ。

(ジイド 川口篤訳『贖金づくり』岩波文庫)

ここで、ジイドの分身と思しき、小説家のエドゥワールが、自身の小説観を伝えている。我々が現実に対して抱く観念や表象と現実そのものは、決して一致することはない。現実是我々の言葉なり観念なりを裏切る形

でしか存在し得ないと言うのだ。エドゥワールに言わせれば、「現実主義」、つまりリアリズムとは、その競合関係を忘却し、表象なり觀念なりを現実と錯覚するような認識論的転倒以外の何ものでもない。彼が描こうとしているものとは、このような現実と表象との齟齬、言い換えれば、登場人物の思い描く現実が現実そのものとは決して一致しえない、関係そのものである。

このようなエドゥワールの小説觀を踏まえた上で、小林は「私小説論」において、次のように語っている。

例へば現実のある事件は決して小説のなかに起こらない、どんなに忠実に作者が事件を語つてみようとも。事件が起つたとは、事件を直接に見た人、間接に聞いた人、これに動かされた人、これを笑つた人等々の人々が周囲に同時に在るといふ事だ。事件は独りで決して起らない。人々のうちに膨れ上り鳴りひびくところに、事件は無数の切口をみせる。エドゥアルに言はせれば、在來のリアリズム小説は、この無数の切口に鈍感だつたのである。

「個人といふ単位」つまり、共有された統一的な人格が収奪され、情熱や心理についての型が解体し、無軌道な感覺の生起と消滅が内面を支配するに到つた「都會人」には、ある事件についての共通の認識など、もはや産まれようがない。存在するのは、無数の人間がそれぞれ抱える無軌道な感覺によつて捕らえられた、無数の事件の様相である。小林に言わせれば、ジイドが俯瞰し得た現代人の様相とは、このような、〈私〉の内部と外部との関係、小林の言葉で言えば、「個人性と社会性との各々に相対的な量を規定する変換式の如きもの」である。そして、そのような〈私〉の文学的形象を指して、小林は「社会化した『私』」と呼んでいるのである。

おわりに——「私小説論」の位置

私小説という概念の定義をめぐる、大正期から戦後まで多くの論者によって議論されてきているのは、文学史上の常識である。言うまでもなく、私小説論議は、もともと、中村武羅夫が「本格的小説と心境小説<sup>(19)</sup>」において、作者の心の動きのみを記す「心境小説」を否定して、トルストイの『アンナ・カレニナ』のような虚構によって構築された「本格小説」を提唱したことに始まる。中村の主張を、久米正雄が『「私」小説と「心境小説」<sup>(20)</sup>』において、すべての芸術の基礎は「私」にあり、その「私」を批判を交えずに表現することこそ、散文芸術の本道であると批判し、私小説をめぐる論議は、その後、昭和三〇年代まで、多くの論者によって交わされることになった。

そして、興味深いのは、私小説論議が戦時中も間断なく続いている点にある。昭和一〇年代に入ると、それまで交わされていた、私小説が純文学かどうかという論点が後景に退き、私小説と古典文学との接点を指摘する議論が盛んに交わされるようになる。このような議論の背景に、国民精神総動員のための国民文学論が盛んに提唱されていた文壇状況、あるいは戦時下という時代状況の存在が、見え隠れしていることは、言うまでもない。

それはともかく、これらの言辞を閲してみた場合、私小説を〈日本の伝統〉の流れを汲むものとして位置づける、その位置づけ方に、二つの型があることに気づく。

まず第一はフォルム・文学形式に着目して、私小説と古典文学の接点を浮かび上がらせる議論である。「私小説を遡つていくと、国文学の伝統では、日記文学と随筆文学がある<sup>(21)</sup>」、「日本の文学精神(筆者注、「短歌」「俳

句」を指す)には「断片の愛好癖がついてまはつてゐる」「かういふ風な常識を伴つて確立した日本の『私小説』が、『小説』としてはかなり特殊なものであることは否めない」、<sup>(22)</sup>「私小説といふのは『徒然草』とか『奥の細道』とか、さういふ系統のものだと思ふね」、<sup>(23)</sup>「蜻蛉日記や和泉式部日記のやうな平安朝の文学は、日記であるよりは思ひ出の記や、身辺雑記風の叙情文学であるから、『私小説』に似たふしもある」<sup>(24)</sup>などの言辭が、それに当たる。これらの議論はいずれも、私小説の文学形式に着目し、作者の身辺雑記と主観のみに叙述を限定している点、物語文学に見られるやうなプロットが不在である点を指摘した上で、『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』、『徒然草』、『奥の細道』などの日記文学、随筆文学との共通項を浮かび上がらせ、私小説を日本の伝統の流れを汲むものとして、位置づけている。

第二は、第一の方法とは異なり、むしろ、私小説に叙述された内容、つまり、そこに描かれた「私」が、<sup>(25)</sup>〈日本的〉であると指摘する議論である。「西洋の逞しい近代精神から出発したものが、しつかりと地についた足を誇りとしながら辿りついたところは、まことに東洋的な、日本的な『私』であつた。ここに私小説作家の現実的凱歌と、理想的敗北がある。彼等のひらいた自我の内容は、伝統的自我の虚無性に達するほかなかつた。」「私小説といふものは知性的なものではなくて、古い言葉で言ふと義理人情、さういふ日本の伝統の上に立つてゐるのぢやなんぞせうか」<sup>(26)</sup>、「この二人(筆者注、正宗白鳥と徳田秋声を指す)の大家が、年をとつてから、故郷をなつかしむ心になるのを、私は羨ましくも思ひ、美しいとも感じた」<sup>(27)</sup>「『私小説』は、日本の近代文学の独特な文学であり、日本の近代文学の故郷のやうなものである」<sup>(27)</sup>などが、それである。虚無感・義理人情、望郷の念など、私小説に描かれた「私」の心境とは、西洋の近代精神とは無縁な、〈日本的な私〉であり、だからこそ、私小説は日本の伝統の流れを汲むというのが、これらの議論の眼目である。

このやうな戦時下の私小説論議を踏まえて、これまで考察してきた、「私小説について」から「私小説論」



に到る、小林秀雄の言辭を閲してみた場合、とくに後者、〈日本的な私〉を私小説に見る議論の起源に、小林の批評が位置していることが、容易に理解できる。

猪俣は「封建的絶対主義の強き残存」を認めつつも、すでにそれは物質的基盤を失っていると論じ、小林もまた、私小説が描く「私の封建的残滓」を支えた、「社会の生活様式」は「外的な経済的な事情によつて」「急速に變つて行つた」と、分析していた。そして、従来の私小説の消滅を予感した小林は、ジイドを手掛かりとして、統一的な人格を持ちえない現代の〈私〉と社会の關係の在り方を描くところに、新しい文学の可能性を見ようとした。

しかし、今日から見れば、戦時下の私小説論議は、小林による一連の私小説批評を反転させる形で進行したと見ることが出来る。小林が、やがて消滅すると付言しつつも提示した「私の封建的残滓」という概念それ自体が、一人歩きし始めるのである。浅野晃は「国民文学への道」<sup>(28)</sup>において、「文学者はもはや一個の国民的な臣民としてしか新生することができない」「いままでの文学は市民文学であつて国民文学ではなかつた」と論じ、昭和一五年、国民文学を提唱したが、私小説論議もまた、戦時下における国民精神総動員の流れに巻き込まれていく。小林が提示した封建主義的な〈私〉は、私小説論議の過程において、古代以来、日本文学に綿々と描かれ続けた〈日本的な私〉に変質していったのである。やがて消滅すべき宿命を内包する封建的残滓として、時間軸上の概念として提示された小林の日本的な〈私〉は、西洋対日本という図式のもとで、空間軸上の概念として變形化され、西洋的な〈私〉とは対立せしめられた〈日本固有の私〉として捉え直されていった。そして、私小説論議は日本文化、日本国民の実体化という戦時思想に間接的に貢献する方向に向かうこととなるのである。西洋的近代に対する日本の後進性についての劣等意識の裏返しとして、表象のレベルで西洋と日本を等価の關係に置こうとした同時代の思潮的傾向、だからこそ、西洋を対称的に参照することによって日本

の人種、民族、国民的主体を確立しようとした同時代の思潮的傾向が、戦時下の私小説論議にも見え隠れしている。

無論、私小説論議の、戦時下における国民文学論への合流について、小林にその責を負わせることはできない。しかし、やがて消滅するものとして提示された「私の封建的残滓」という観念が、戦時下という時代状況において、マルキシズムの認識論的布置が文壇から放逐された時、時間的概念から空間的概念に変質化されたといったのも事実である。否定的存在として提示された〈私〉は、それを支える物質的基盤を問うことを止めた時、いともたやすくその存在が実体化されていったのである。その意味において、今日から見た場合、小林の私小説批評は、結果的に、戦時下の私小説論議を誘引する否定的媒介としての役割を果たしているとも、見ることができるとは思われる。

#### 注

- (1) 『文芸首都』 昭和九・九
- (2) 「自然と不自然」『太陽』明治四一・五 引用は『明治文学全集』四三
- (3) 『東京朝日新聞』大正六・一一一七・三
- (4) 博文館 大正六・六 引用は岩波文庫
- (5) 『新潮』昭和八・一二二
- (6) 『文芸』昭和一三・九
- (7) 『天皇制国家の透視 日本資本主義論争Ⅰ』（社会評論社 一九九〇・四）解説
- (8) 『日本資本主義発達史講座』第一部 明治維新史 岩波書店 昭和八・二一
- (9) 『太陽』一九二七・一

- (10) 『勞農』一九二七・創刊号 引用は(7)と同じ
- (11) 『文芸春秋』昭和八・五
- (12) 『日本浪漫派批判序説』未來社 一九六五・四
- (13) 『日本資本主義発達史講座』第二部 資本主義発達史 岩波書店 昭和八・二一
- (14) 『新潮』昭和七・六
- (15) 『文芸春秋』昭和九・一
- (16) 「現代の文明を評し、当来の文明を卜す」『中央公論』大正四・七 引用は明治文学全集五〇
- (17) 『改造』昭和九・一〇
- (18) 『父を売る子』新潮社 大正二三・八
- (19) 『新小説』大正一三・一 引用は近代日本批評大系 五
- (20) 『文芸講座』大正一四・一、二 引用は(19)と同じ
- (21) 舟橋聖一「私小説とテーマ小説に就いて」『新潮』昭和一〇・一〇
- (22) 伊藤整「私小説について」『現代文学』昭和一六・九
- (23) 伊藤他「座談会『私小説論』」『新潮』昭和一七・五
- (24) 森山啓「和歌と小説」『新潮』昭和一九・三
- (25) 豊田三郎「現実派と理想派」『新潮』昭和二二・三
- (26) (23)と同じ
- (27) 宇野浩一「私小説」の伝統」『文芸』昭和一九・五
- (28) 『新潮』昭和一五・一一